

EDU-Port事業の日本の教育の国際化・  
質的向上への効果ーこれまでに実施さ  
れた事業の報告書の分析・関係者への  
ヒアリングを通じて

半原 芳子

沼尻 卓也



# 本研究の目的と問題意識

なぜ「国内還元」を改めて問うのか



## 理念と実践の乖離

EDU-Portニッポンは日本の教育的知見の海外展開と、その過程で得られた学びの国内還元を理念としてきた。

しかし、国内還元は、個別事業の付随的成果として断片的に語られ、全体像やメカニズムは十分に可視化されてこなかった。



## プロセスの再定義

本調査研究は国内還元を成果物ではなく、**海外協働を契機とした学習と変容の循環プロセス**として捉え直す。

# 研究の方法と特徴

国内還元を「プロセス」として捉えるために

- 分析対象
  - EDU-Portニッポン  
(調査研究／パイロット事業／応援プロジェクト)  
成果報告書 **112件**
- 方法の組み合わせ
  - 内容分析
  - AIによる共起ネットワーク分析・クラスタ分析
  - 福井大学における長期・実証的事例研究
- 特徴
  - 国内還元を「アウトカム」ではなく、教師/実践者の省察・実践・組織的学習が相互に影響し合いながら循環するプロセスとして捉え、成果報告書の内容分析と共起ネットワーク分析、クラスタ分析、事例研究を往還させて分析を行なった。

実施主体の分類	報告書数
学校	3件
大学・大学院	31件
民間企業	57件
非営利団体	18件
教育関係組織	3件

# 日本型教育の再定義

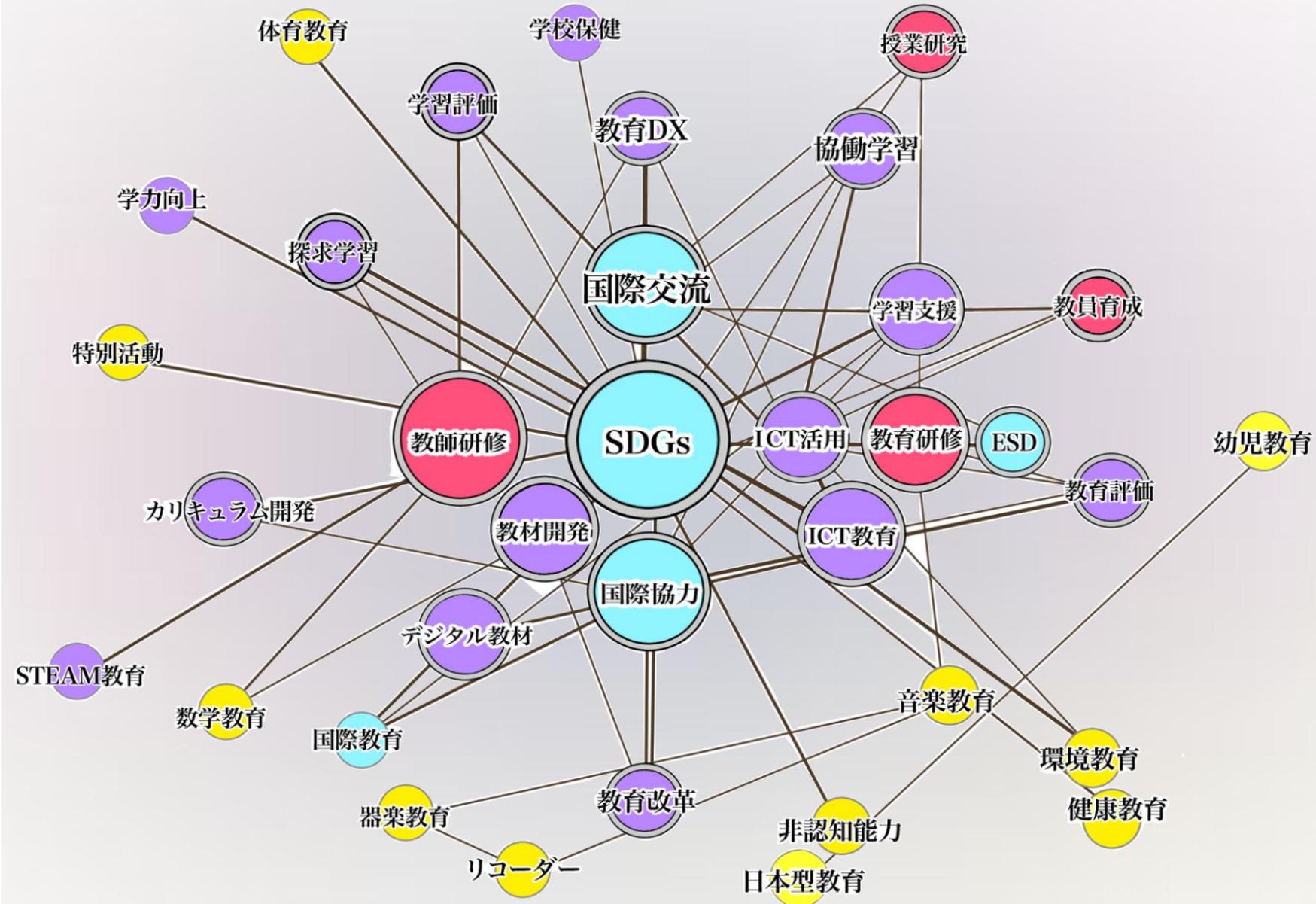
## 112件分析から導かれた新しい理解

単一モデルではない

日本型教育は特定の制度・教授法・単一モデルとして固定されるものではなく、国際協働を通じた生成的な実践

省察的学びの促進

国際協働を通じて教育実践者の省察的学びを促し、それを授業・学校・地域へ循環させる教育実践モデルとして機能



# 国内還元の構造：4つの意味領域

## 共起ネットワーク分析、クラスタリング分析の結果

国内還元は以下の4領域の相互作用として成立し、領域は分断されず相互に結びつき再文脈化される。

国際理解・国際協力  
理念・価値観



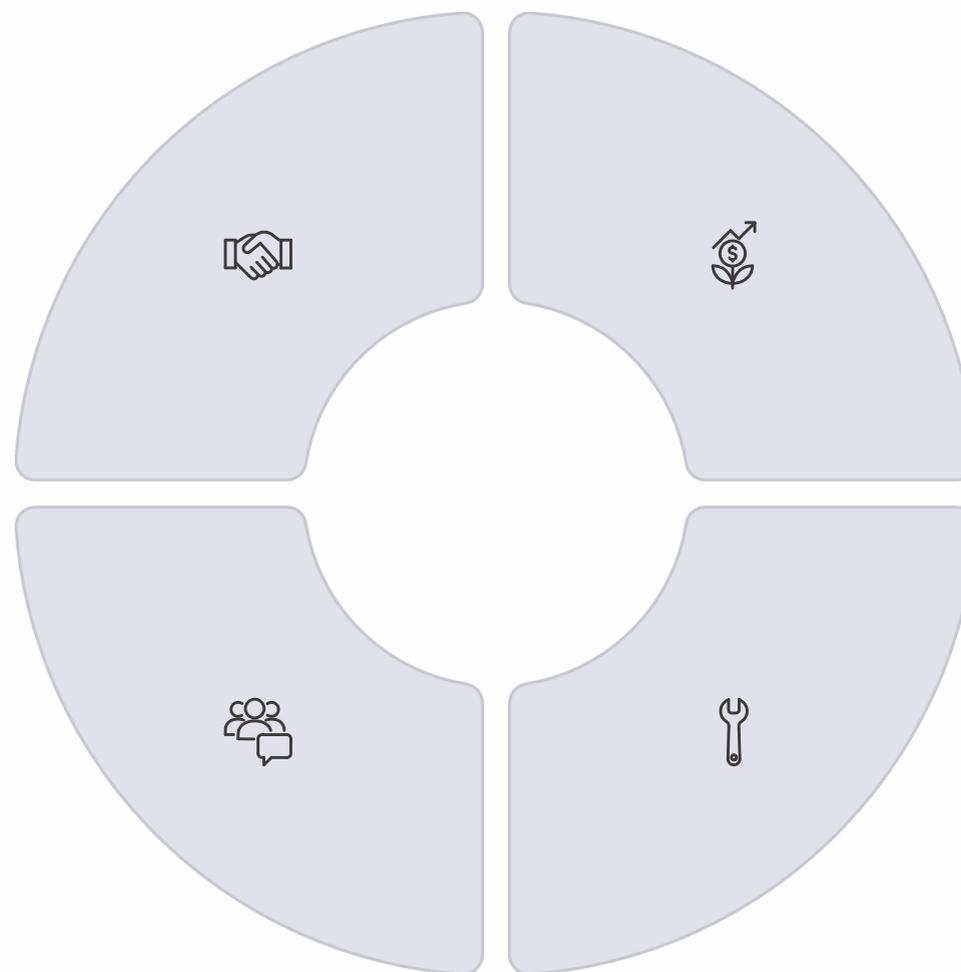
教育実践者の学び  
力量形成



教科教育・地域連携  
展開



ICT・教材開発  
実践技術



# 国内還元の構造

国内還元の生成プロセスに関する事例分析: 8機関へのインタビュー から

## 高等学校A

- 国際協働による職業（ものづくり）教育の質向上と生徒キャリア形成への還元 [2023年度]  
→ 授業研究動画・研究協議や生徒交流を通じた探究学習とキャリア教育の発展
- 主：国際理解・国際協力、教科・領域別実践  
／地域への展開

## 国際NGO機関B

- 難民支援の実践を基盤とした若者への国際理解教育 [2020～2021年度]  
→ 難民課題を軸とした若者の理解促進と対話・参加の機会形成を通じた 自分事として捉える学び
- 主：国際理解・国際協力

# 福井大学事例の位置づけ

## 国内還元的一般構造を具体化する分析的事例

### 研究対象の概要

- **対象**：福井大学（2016年度以降）
- **目的**：国内還元がどのように具体化されてきたのかを長期的・縦断的データに基づいて分析し、その深層構造を理論的・実証的に検討
- **協働国**：マラウイ／ウガンダ
- **分析視点**：教師・生徒・学校の**3層**
- **活用データ**：生徒インタビュー（2件）、ウガンダ渡航教員への事前・事後質問票およびインタビュー、本プロジェクト参加教員の実践報告書（5件）、授業記録・協議記録等の複数データ

2018-2019：多国間展開・国際RT拡大  
パイロット事業採択  
マラウイ・エジプト等へ派遣／現地RT実施  
約470名規模の国際RT開催（福井）

2022-2024：制度化・地域展開  
草の根技術協力と連動  
学校—大学—行政の3層PLC確立  
アフリカ域内RT・国際学会発表

2016-2017：参画・基盤形成期  
EDU-Port参画を契機に国際協働を開始  
JICA研修フォローアップとして福井RTへ招聘  
「福井型授業研究（LS）」の国際紹介

2020-2021：オンラインLS確立（コロナ期）  
オンライン授業研究モデル構築  
国境を越えたPLCネットワーク形成

2024-2025：新展開と国内還元の深化  
マラウイ・ウガンダで協働授業研究  
訪日研修による省察文化の共有  
大学間連携基盤形成（NCE・Makerere）

国内還元の中核は**教師専門性の変容**であり、これが生徒・学校へと波及する構造が確認された。

# 教師変容から生徒・学校への波及

知の循環モデル

## 第1層

海外での授業研究・異文化との遭遇  
→ 教師の省察と授業観の再構成

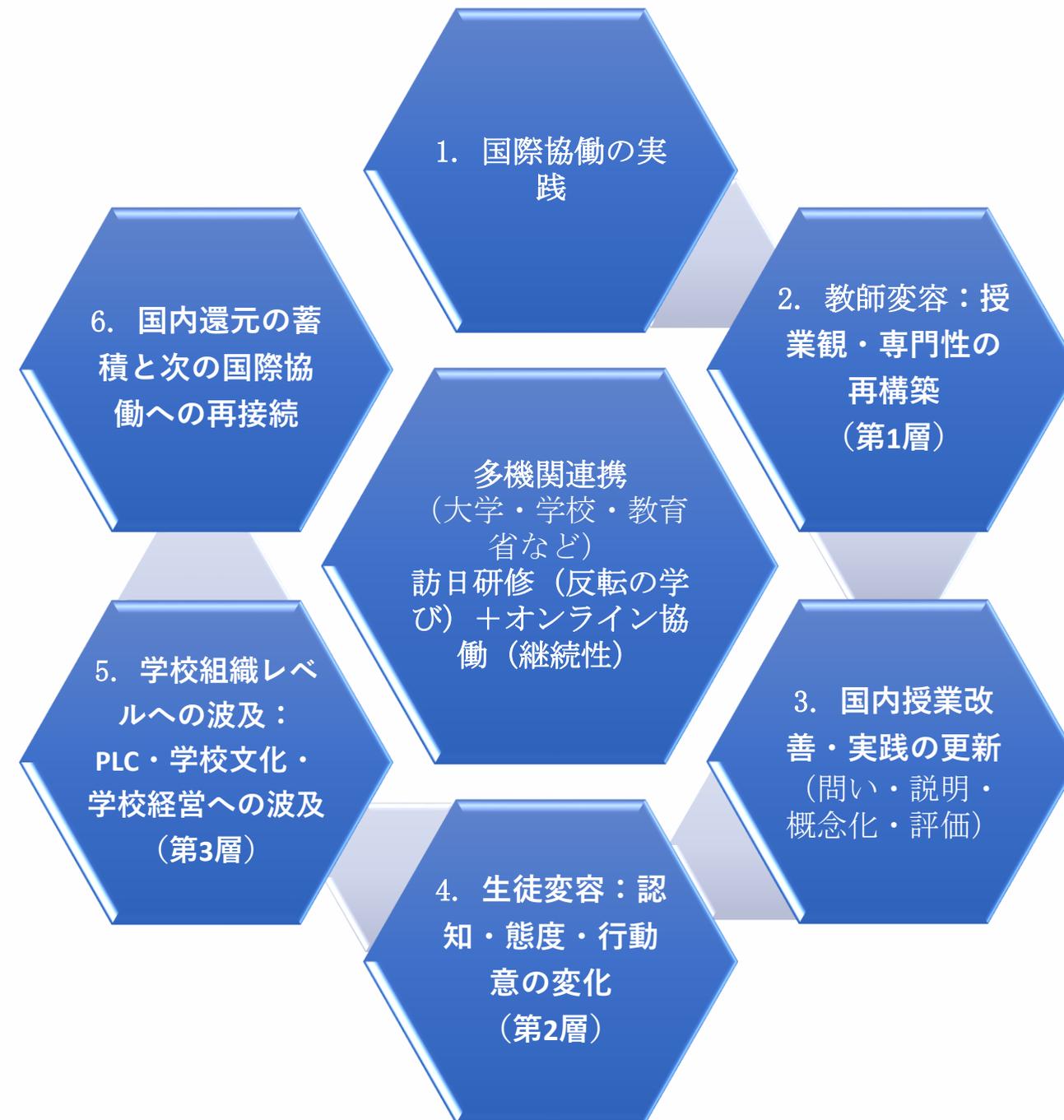
教師変容が

## 第2層

生徒の認知・態度・行動意図の変容

## 第3層

授業研究文化・学校改革へ波及



# 国内還元指標と評価の考え方

量と質をどう評価するか



## 量的指標

研修回数・参加者数・協働活動数  
→ 広がり・持続性を可視化



## 本質は質的側面

- 実践者の様々な観の変容
- 対象者の学びの質
- 組織の活性化
- 地域・ネットワークへの波及



国内還元を**プロセス重視・生成的成果として評価**することにより、  
海外協働を契機とした学習と変容の循環プロセスを捉える

# 次期EDU-Portニッポンへの示唆

制度設計に向けた3つの提案

01

---

## 知の循環インフラとしての再構築

EDU-Portニッポンを「海外展開→国内還元→再協働」を回す知の循環インフラとして再構築し、持続的な学びのシステムを確立する。

02

---

## 協働プラットフォーム機能の強化

多様な主体（大学・学校・地域・企業）が学び合う協働プラットフォーム（port）機能を強化し、横断的な知識共有を促進する。

03

---

## 基幹要素としての再定義

国内還元を海外展開の付随成果ではなく、海外展開を成立させる基幹要素として再定義し、制度設計の中心に位置づける。

ご清聴ありがとうございました